

大丈夫っ!
スパッツだから!



FOR ADULT



ヒナギクさん...

ヒナギク



「大丈夫っ！スパッツだから！」
2007年 7月15日発行

- ◇2年前だ・・・古いよ。
(これ作ってるのは2009年6月末)
ここまで古いと見たくないですが、
最近、もっと古いのを直視しないと
いけないことが何度かあったので
多少は耐性が・・・。

- ◇この本の前にナギ本が出ているのですが、
そのときは深く考えずにつけていた
「大丈夫っ！」の部分を流用して、
ハヤテ本は全部タイトルに
「大丈夫っ！」とつけよう！と決定。
ついでなんで、ロゴっぽいのも作って
全部同じ仕様で！と、
今までやらなかったことを試してます。
おかげで、タイトル決めるのは楽になりました！
他にも、
表紙→冒頭→(目次とか奥付)→本編を
試しにやってみたりしています。

- ◆1ページ目で書ききれなかったことを追記で。
マンガ：2月かずお
小説：鷹宮沙玖羅
4コマ：樫見 正央





じゃあ
とりあえず

ハヤ太君の
ケータイ番号は
〇〇〇一〇〇〇……

はあ？



無い！
それは！
無いっ！

ふーん



いつかみたいに
ハヤ太君が
遅れてきても
連絡がつくように

……あつ
言い忘れてたけど
ハヤ太君が
ヒナに用事がある
みたいだったので
今日の夜9時に
生徒会室ならつて
言っておいたから

この後の
ヒナの用事が
無いのは
調べてある

……



ぼん

えっ？

今からでも
シャワー室に
行く時間は
ある

今……
6時半!?



そうそう

ぽたんっ

秋
MEMO



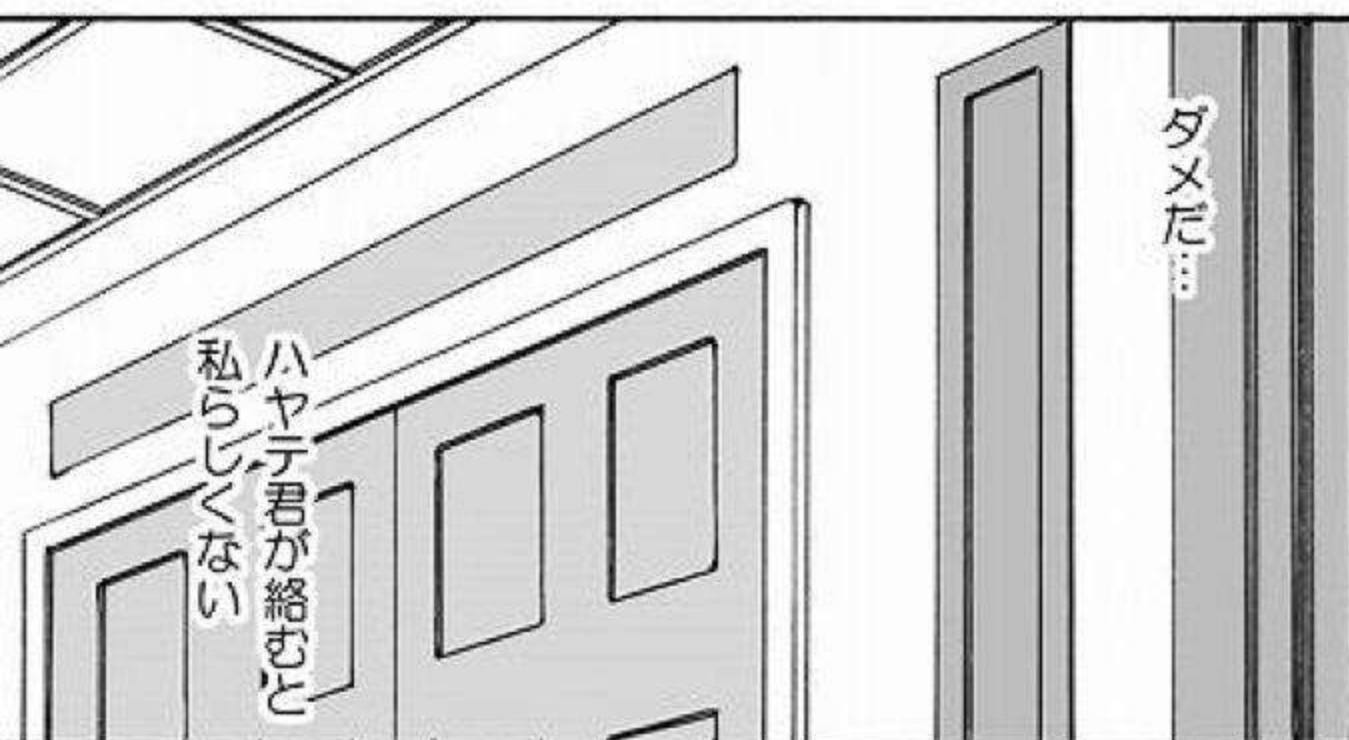
美希に言われでい
思わすシャワーを
浴びできてしまったが...

重症ね

そこまで
慌ててシャワーを
浴びる理由なんか
あったか？



そういえば
剣道部が
終わった時に
シャワーを...

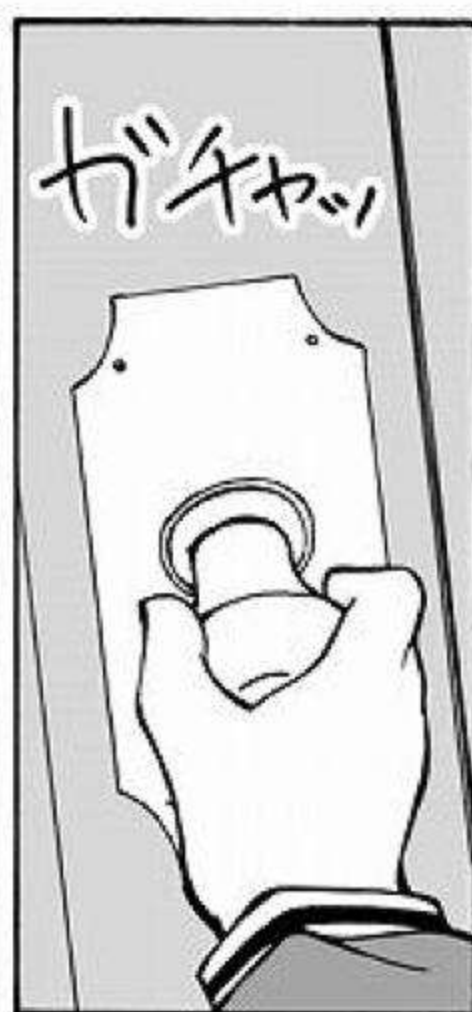


ダメだ...

ハヤテ君が絡むと
私らしくない



すごい
負けっぱなしな
気がする

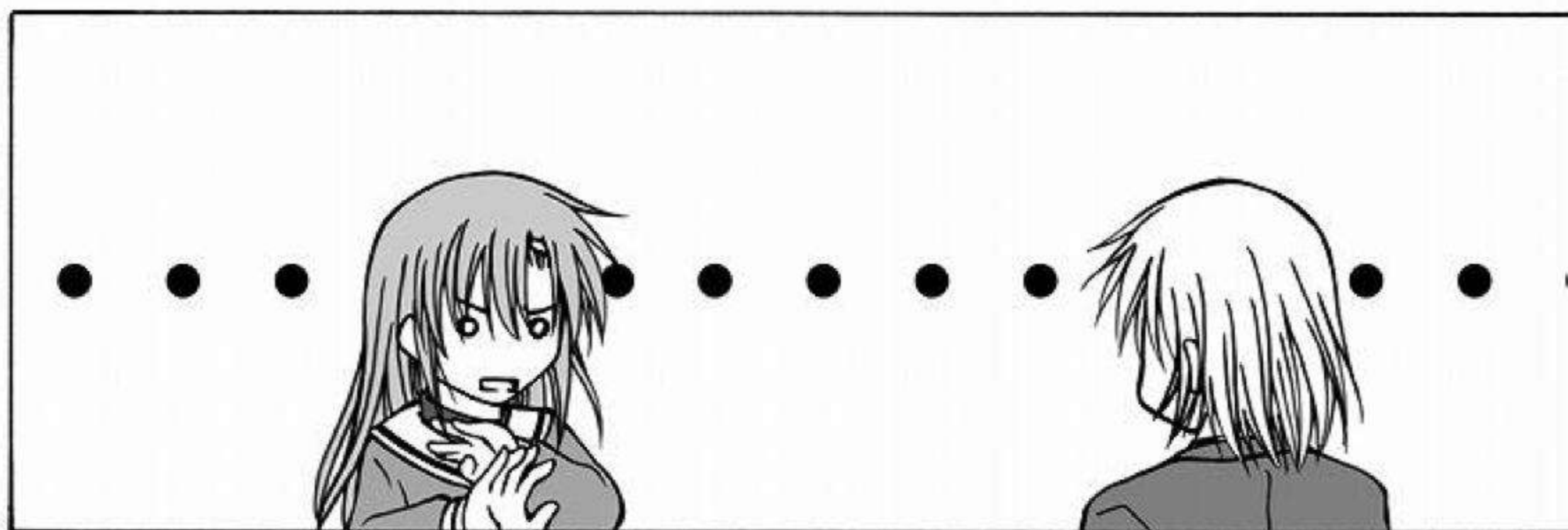


ガチャッ



ガッ

なんか...私
振り回されてる...





あれ？

話違ひじゃない？



さっきの
ツッこんだら
怒られる
だろーな…

そんな事
ないですよ

…で
用事って
何ですか？

はあ？



えっと…

ヒナギクさんが
夜8時に
生徒会室で
待ってるって

花菱さんから
聞いたん
ですけど…

冷静になれ私…

美希の
聞き間違い？
伝え間違い？

いや違う
美希に限って
それはない！



絶対にはげなうさぎだわー!!

あ…
あれ？

僕何か
しましたか!?



なんだか
謝ったほうが
良い感じに
なってきたのですが

どうで
地雷を踏んだのか
わからないですよ！

やっぱり
土下座か？
土下座してから
考えるか！？



あの
ヒナギク
さん…

何で
あなたが
絡むと

何でよー！

こんなにも
自分が
保てないのよ！！



ばかあ

負けっぱなし
じゃないの



——なんて
冗談を言っと
男の子は
真に受けるの
かしら？

…って展開に
違くないっ！



これは
旧校舎の時の…



ヒナギク
さん？

ヒナギ…

いきなり
何を
してるん
ですか!?

私だけ
負けっぱなしは
癪じゃない

ふんっ

これでハヤテ君も
夢でうなされたり
頭を悩ませると
いいのよっ!

…って

どんな理由ですか！

それにそんな事されると…

大丈夫っ！

ちゃんと勉強してるから

そーゆー問題では…

健全な男の子なら逃げちゃダメよハヤテ君

うっ！

んーん



こし
こしで
こんなに大きく
なる物なの？

こしを
ロロ...

ヒナギク
さん？



はっ



別に

グー

びっくり
してたんじゃないかと
少し大きいなって
思ってただけよ

やめるなら
今のうち

やめません！



おーっ

こっちは死ぬほどドキドキ

ハヤテ君はいつもと変わらないってどういふ事?



そりゃ私は女の子らしくなくて可愛くないかもしれないけど

ハヤテ君だって少しくらい余裕なくしてもいいじゃない!



んっ!



えーっと
他に何をやるの...



ピクピク
してるけど
気持ちいいのかな？

いっしょ



ッパッパッ

あっ

んあっ!?



くっ!

ピクッ

んっ

おもしろ

びっくりした
いきなり
あんな勢いで
出てくるなんて

けほっ

……ふーん
こんな味なんだ

ちっ

けほっ

でも
これで私の……

ふっ

……
えーっと？

な…

何か
雰囲気
が
いつもと違…

きや!?

ちやんと
ヒナギクさんに
警告したこと
ありますよね?

がばっ

どきっ

そんな
怪い態度だと
何されても
知らないって

あうっ



それから

この部屋に
ベッドないので
ソファで
我慢して下さい

ちよつ



今日も
スパッツ履いて
いるんですね

でも
スパッツまで
濡れてきて
ますよ?

ひあつ!?

グッ

そんなに
僕の啜えて
感じていたん
ですか

そ…
そんなこと
な…ない…

いい、

じゃあ
パンツの中も
確認して
大丈夫ですね？

あっ!?

お、



やっぱり
グチヨグチヨに
なってるじゃ
ないですか

ふぎ...

ふぎ...

これなら
もう挿れても
大丈夫そうですね

いつもの
負けず嫌いは
どうしました？
ヒナギクさん

ずる
ずる
ずる

あう…

このままじゃ
負けっぱなしなのよ

ダメだ…
考えがまとまらなく
なってきた

どうしたら
いいのかわからない

ずる

じゃあ
挿れますよ

ぐん

ずる

うん……っ

ずいずいっ

だんだん
言いなりに
なって
きましたね

じゃあ
せつかくなんで
胸も触らせて
下さいね

ふえ!?

ちゅっ

わ……
私の……胸
ち……小さいから
……っ!

そんなんじや
負けっぱなし
ですよ?

おっ

ん……っ

びん

結構
大きいじゃ
ないですか

し…
下向いてる
か…から
だもん

くりっ

は…
ハヤテ君
だって

お嬢さまの
着替えを
手伝った事が
ありますから

なんで制服の
脱がしかた
知ってるのよっ



こんなお話を
他の女の子の話
じゃなくって...

あれ?
嫉妬でも
しましたか?



だ
だ
だ

うー...

今日の
ヒナギクさんは
すごく
可愛いですね



117

びん

びん



ぶ
ぶ
ぶ

びん
びん

あ...

あう...



え……っ？

もう少し
動きやすく
しましょうか

スパッツ
脱がしますね

ぢゅん

ぼん



じゃあ
いきますね

はい
脚伸ばして
下さい



かあああ



ズル

ひああっ



ヒナギクさん
顔隠さないで
見せて下さいよ

ぐいっ

や...あ

はや...てくん
ぽっかり
よゆう...で
ずる...いっ

ふあ...

もう
余裕なんか
ありませんよ

これ以上
手加減なんか
出来ません
からね！

びしょ

びしょ

ぬはっ

びしょ

も...

やあ...んっ

びしょ

あっ！

びしょ

だ...めっ

びしょ

びしょ



ひああ...

ん...ふあっ!

いってきますよ
ヒナギクさん

びん びん びん
ぐん ぐん
ぐん ぐん

あ...あっ

くっ



ん—っ!!

ああっ!!?



どうしました
ヒナギクさん？

あ…
調子が悪い
違うわよ



うー…



さつきみたいなの
ヒナギクさんも
可愛くて
好きですよ

いつもの
強気の
ヒナギクさんも
好きですけど



もじっ



ただ…

ずっと
負けっぱなし
だったなーって





一年に一度、その日くらいは素直に我儘に
いちばん欲しいものを求めることは
なんて難しいことなのかしら

その出来事は、彼女の一言から始まった。

ヒナ祭り祭りも無事に終了し、白皇のただっ広い敷地内は穏やかな静寂に包まれていた。

時刻は深夜。とうに日付が変わっている。
そんな中、時計塔の最上階、現生徒会室にのみ、灯りがともっていた。

「ハヤテくん、クッキーもおいしいし、とっても嬉しいんだけど、本当はもっと別に欲しいものがあるの」

ヒナギクはハヤテの前でさっそく一枚食べると、きれいにラッピングされた袋をテーブルに置いた。

何の脈絡もなく発せられた言葉にハヤテは戸惑ったが、彼女の表情を見て思わず言葉を呑み込んだ。

いつものヒナギクらしくない。

緊張して強張った頬も潤んだ瞳も固く引き結ばれた唇も、普段の余裕溢れる彼女からは想像もつかなかった。

これはとんでもないものを要求されるのではないだろうか？
そんな彼女の意を決した様子に貧乏執事は内心ヒヤヒヤしながらも、一応笑顔を沿えて返事をする。

約束に遅れてしまったのは自分なのだし、できるならヒナギクの喜ぶものをあげたいと思う、けれど、いかんせん彼の自由になるお金は十二円。それだって億単位の借金を抱える今とな

いじわるしないで

鷹宮 沙玖羅

つては勝手に使つてよいものではないだろう。

見栄半分焦燥半分でハヤテはとりあえずスマイル0円を実行した。

「なんですか？高いものは」用意できませんけど、遅れてしまつたお詫びにプレゼントしますよ」

男の意地で言い切つたものの、彼の背中には冷や汗が滝のごとく流れている。

ヒナギクだって白皇に通うお嬢さまなわけだし、安物など欲しがるはずがないのだ。

ブランドのバッグか？
高いアクセサリーか？
煌びやかなドレスか？

ブルジョワとは限りなく縁の薄かつた彼が思いついたものは、せいぜいこのくらいだ。

そしてそれらは確か、彼の予算に0がいくつも足された金額だつたと記憶している。

そんなもの要求されてもプレゼントできるはずがない。
男の60回ローンを組もうにも、彼は生まれてこのかた、クレジットカードすら持つたことがないのだ。

請合つておきながら、彼の脳裏に最悪のシナリオが浮かぶ。

けれど、幸か不幸か彼女は貧乏執事（彼女いない暦十七年）が思いもよらないプレゼントを要求したのだつた。

「ありがとう」

言い終わるや否や、ヒナギクはハヤテをソファアに押し倒した。完全に油断していた彼は、情けなくも女の子に組み敷かれ、あまつさえ腹の上に押し掛かれるというある意味非常においしい状況に陥つた。

「ヒナギクさん？」

さすがに焦つて彼女の細腕を掴む。

なんというか、この体勢は、非常にヤバイ。けれど、彼女はそんなことは意に介さずに、思い詰めた様子で告白した。

「誕生日プレゼントはハヤテくんがいいの。来年も再来年もその先もずっとプレゼントはいらぬから、今ハヤテくんをちよ

うだい」

真つ赤な顔で、ヒナギクはハヤテに近づき、そつと唇を重ねた。その唇が震えている。

ずつと考へて悩んで、やつとの思いで今こうしているのだから。

（かわいいなあ）

キスもしたことのないよううぶなヒナギクにハヤテの決して純真ではない男心が揺さぶられたが、ここはぐつと抑えてヒナギクのしたいようにさせてみる。

羞恥に耐えながら自分を求めるいじらしい姿を觀賞していたかつた、というのが大きな理由だが、それを抜きにしてもヒナギクの行動はあまりにも突飛すぎて、理解が追いつかない。すなわち次の行動が読めない。迂闊に行動に移るのは、自殺行為に思われた。

そんなハヤテの心の内を知つてか知らずか、ヒナギクは震える指先でハヤテのズボンのファスナーを下ろした。

（え？いきなりそこですか？）

驚いたが、ハヤテに異論はない。むしろかわいい女の子に触つてもらえるなら願つてもないことだ。思いのほか、ヒナギクは積極的だつたというところで納得する。

けれど、ズボンの前をくつろげたとこで、ヒナギクが息を呑んだ。

「ヒナギクさん？」



「えっ……」

これ以上ないというくらい、耳まで赤く染まっている。その割には遠慮なく凝視しているのは年相応の興味といったところだろう。

ハヤテは今更ながらに気まづくなって頬を掻いた。

「あー、その、すみません。自分からキスしてくださったヒナギクさんがかわいくてつい」

ヒナギクのあまりに純な反応に、ハヤテの良心がわずかに痛んだ。だから、筋違いだが一応謝っておいた。

事実、今ヒナギクが凝視しているそれは、自分で確認しても、うわーと言いたくなるほどに元気なのだ。

ハヤテだって男なわけだから、興奮すれば当然そこだって反応する。だけど、限度ってものがあるだろう。どうやら、彼自身に自覚はなかったが、ヒナギクのようなタイプが大いに好みであるらしい。

すでに大きくなっているハヤテの性器を目の当たりにして、ヒナギクは明らかにひるんでいた。

「あの一、やめますか？」

「いや。やめない」

意地を張った彼女は、ハヤテの性器を取り出すと、意を決して口に含んだ。

「んんっ」

少し苦しそうな息が鼻から抜ける。

仔猫が必死にミルクを飲んでいような拙い舌の動き。

初めてなのが容易に推測できるのに、先端を集中的に弄られて、しだいにハヤテの余裕がなくなっていく。

「ヒナギクさん……これ以上されるとさすがに我慢しきれなくなるんですけど……」

一応許可を得るために申告してみる。

この期に及んで、やはり無理やりはよくないなーなどと思っている、今どき珍しい妙に律儀な少年である。

案の定ヒナギクからは簡単に許可が降りる。

当然、許可が降りることがわかっていたからこそ申告したというの内緒だ。

「我慢……しないでいいのに。わ、私、こんなことするの初めてだからよくわからなくて。ハヤテくんにはぜんぶ任せるから」

どうやらヒナギクの知識はここで終わっているらしい。

今ならばきつと、ハヤテのすることが彼女の中で常識になる。ということとは、たいていのことが『常識だから』で済まされてしまうのだ。なんとすばらしいことか。

ハヤテはごくりと喉を鳴らした。

「そんなこと言っているんですか？僕、今、けっこう余裕ないんで、何するかわかりませんか？」

自己申告。答えは当然聞くまでもない。

「……いい……から、何しても。だから私にハヤテくんをちようだい」

純真な態度のヒナギクに、ばれないようにニヤリと笑う、一

応、たぶん、もしかしたら律儀（希望）な少年である。

「わかりました」

「きやつ」

ハヤテは我が意を得たりと逆にヒナギクを組み敷き、キスをしながら胸を揉み始めた。完全にスイッチはオンである。

「……ふあ、……あつ……あんっ」

身を振らせる彼女の喉から甘い吐息が零れる。

初めてという割にはいい反応だ。ハヤテは制服の上からヒナギクの胸に指を食い込ませた。

「意外と、胸あるんですね」

「意外と、……って……なによ……」

潤んだ瞳でハヤテを睨むヒナギク。

けれど、そんなことをしてもはつきり言っただけだということに、はたして彼女は気付いているのだろうか。

彼は柔らかい胸の感覚を楽しみつつも、表情を堪能することも忘れない。

「いえ、ヒナギクさんって細いから、胸も控えめなのかと。ほら、脚だってこんなに細いし」

言いながら、ハヤテはヒナギクの脚をさすり上げた。

「んっ！」

ヒナギクがピクンと反応を示す。

「へえ、触っただけで感じるんですか？初めてだって言う割にはいやらしい身体しているんですね。もしかして、僕にされるのを想像しながらひとりですていたんですか？」

ハヤテのいじわるな物言いに、ヒナギクの瞳がますます潤んでいく。

今にも涙が零れてしまいそうだ。

いや、むしろ泣かせてしまおうか。

ハヤテの中で何かが囁く。

「や……言わないで……」

聞こえるか聞こえないかくらいの声でヒナギクが懇願する。

だからハヤテは聞こえなかったことにした。

「じゃあ、こうしたらどうなってしまうんでしょうね？」

ハヤテはヒナギクの足首から上にゆっくりと舌を這わせていく。

「あぁっ……あぁっ、あぁっ！」

ピクピク身体を跳ねさせながら、ヒナギクは恥ずかしい声を

漏らすまいとして口を手で塞いだ。けれど、そうすることでぐもった声が漏れて、却ってハヤテを煽る結果となる。

太腿に行き着くと、彼はスパッツの裾をずり上げ、彼女の白い肌を吸って赤い花をたくさん散らした。

そしてさらに上まで移動して、彼はスパッツ越しに彼女の性器にキスをした。

大きく跳ねた彼女が焦ってハヤテの髪に触れる。

「そこはだめ。舐めたらスパッツが濡れちゃう」

ヒナギクのかわいらしい物言いに、彼はフツと笑った。

「なに言ってるんですか。僕が舐めるまでもなく、スパッツまでもうぐっしより濡れていますよ」

「うそ……」

驚愕するヒナギクに、彼は追い討ちをかけていく。

「うそじゃありません。……ほら、ヌルヌルするでしょう？」

ヒナギクの指を捕らえて無理やり自らの秘部に触れさせる。

そして彼女の指を押し付けるようにしてこすった。

「ひぁ！あっ！やぁあぁんっ！」

ヒナギクは背を丸めて脚を痙攣させた。

「また溢れてきましたね。だからもう諦めてください」

ハヤテは濡れそぼった性器に口を当てると、スパッツ越しに一気に吸い上げた。

「あ——っ！」

吸いながら揉んで、絶えず刺激を与え続ける。

指先まで小刻みに震えるヒナギクの身体。

強張った四肢が限界を訴えるけれども、ハヤテは構わず愛撫を続けた。

ヒナギクの嬌声が苦しげに短く切られる。

「ひ……あ……あ……あぁあんっ！」

堪らないといった声を漏らして、彼女はひととき大きく身体をビクつかせた。

ぐったりして荒い呼吸を繰り返している。

「あれ？もうイっちゃったんですか？まだ何も挿れてないですよ？」

「……………」

「ま、それだけ淫らな身体だったことですよね」

ハヤテはヒナギクのスパッツを下着ごと抜き取ると、脚を二つ折りにさせて、開くようにして両手で押さえた。開かれた局部に、ねばついた銀糸が渡っている。

「ハヤテ……くん……」

達したばかりでとろんとしたヒナギクが彼を見上げる。

「おっと、まだ挿れてあげませんよ？最初は僕が指で慣らして差し上げようかと思っただけですけど、その必要はありませんね。指くらいなら慣れてるみたいだ。……だからいつも自分でしてるみたいに、僕の前でしてみせてください」

ヒナギクは一瞬自分が何を言われたのかわからない様子できよとんとしていたが、理解すると目に見えて愕然とした。

「や……できな……」

「ちゃんと僕のが好きすぎてエッチなヒナギクさんを見せてください。できなかつたら挿れてあげませんからね」

彼女は息を呑んでまたしても泣きそうな顔をした。

けれど、火照る身体を、まだ一度も直接触れられていない性器を放置されたままでは苦しくて仕方がない。

「……………いじわる……」

ヒナギクはおずおずと手を伸ばした。

「……んっ」

クチュクチュといういやらしい音が響く。

すぐにヒナギクの細い指が粘液まみれになった。

「へえ、上手ですね。ヒナギクさんの想像の中で、僕はどんなふうにあなたに触れたんですか？こんなふうには？」

ハヤテはヒナギクの指ごと、もつと深くに押し込んだ。

「ああんっ！」

敏感な部分に突然与えられた強い衝撃に、ヒナギクは悲鳴に近い嬌声を上げた。

「僕は男ですから、あなたの指よりもつと深いところまで届きますよ」

口調ばかりは丁寧な、ハヤテはさらに深いところまで何度もヒナギクの指を押し込んだ。

「しつかり指を動かしてくださいね。もつと苛めてあげてください」

「……ふ……っ……」

彼女の瘦身がガタガタ震え、秘部から溢れ出したどろりとした液体が制服を汚していく。

蠱惑的な香りが辺りに充満して、より互いの興奮を煽っていく。

「ひあ、あ、あ、……あ……」

ヒナギクの身体が強張った。秘部が二人の指をきつく締め上げる。脈動が大きくなる。

しかし、イク寸前でハヤテは指を抜いた。

「や……なんで……？」

失望したヒナギクの目尻から、とうとう涙が零れ落ちる。

それを満足げに眺めたハヤテは、唇を寄せてそれを拭いた。

「ああ、泣かないでください。もつと気持ちよくなるためですから」

ハヤテは服をすべて脱ぎ去ると、ヒナギクと入れ替わるよう

にしてソファアに仰向けに横になった。腰の上をヒナギクに跨がせる。

「ハヤテく……」

「自分で挿れてください。ヒナギクさんならできるでしょう？」

「……」

イク寸前で止められた彼女に拒めるはずがない。

恥ずかしくてたまらないのに、下腹部にくすぶる熱がざわめきながら解放を待ちわびているのだ。

ヒナギクは腰を浮かせた。

「……つく……」

ハヤテの先端がヒナギクの熱い肉の中に埋め込まれる。

「んっ……く……うう……っ！」

ゆっくりと腰を下ろそうとするけれども、敏感な部分に触れるたびに、熱湯に触れたときのようにビクリと身体を引いてしまう。

「ほら、まだ半分も挿入っていませんよ？僕が欲しいんですよ？がんばってください」

口先では応援しているが、彼の態度はヒナギクの痴態を明らかに楽しんでいる。

さすがにヒナギクにもそれがわかったけれど、彼女には彼に身を委ねる他に道は残されていない。

「……ふ……あ……、ハヤテ、くん」

「いい子ですね。じゃあ、そのまま動いてください」

「……ん……ん……っ！」

はじめは怖々腰を動かしていたヒナギクだが、しだいにその動きは大きく大胆になっていく。身体が勝手に快楽を貪っているのだろう。欲望に流されて腰を振る少女は淫らだ。

「……っあ、はあっ、あっ、……ひ……あ……」

「がんばってますね。でもまだまだです」

ハヤテはヒナギクと繋がったまま、彼女を抱きかかえてテラスへと出た。

「やっ！やだ！怖い！」

急に身体が宙に浮いて、ヒナギクは必死にハヤテにしがみついた。身体が強張ってカタカタ震えている。

「わかりますか？今ヒナギクさん、キュッて僕のこと締め付けたでしょう？あれ気持ちいいんですよ」

満面の笑顔で自称真面目で律儀な少年が言う。

けれど、高所恐怖症の上、秘部に男を受け入れたままのヒナギクに、それに応える余裕はない。ただがむしやらにハヤテにしがみつく。

彼が歩いたのはどれほどの時間だったのか。

ハヤテが歩く振動がそのまま伝わってきて、怖いのにねだるような声が漏れてしまう。

恐怖がさらに快楽を強めてしまうみたいに。

それはヒナギクにとってまさしく、甘い責め苦の時間だった。嫌なはずなのに、気持ちよくて。

この時間が続くことを、彼女は無意識に願ってしまった。けれど、彼が歩みを止めたところで、ヒナギクは迂闊にも下を見てしまった。

「ひっ！」

手が震える。

不幸にも彼女が見たのは、何十メートルも先の地面だった。

快楽が瞬時に消えて、恐怖に押しつぶされそうになる。

ハヤテはそこで、繋がったまま器用にヒナギクを反転させて、後ろから抱く形を取った。彼女の手をテラスの手すりに掴まらせる。

「ほら、素敵な景色でしょう？二度目なんだからもう慣れました？」

「や…いや…」

彼女は目を逸らすこともできずに、表情を引きつらせた。

後ろにいるハヤテをきゆうきゆう締め付けているのがわかったが、どうすることもできない。

「手すりにしっかりと掴まっておかないと落ちてしまうかもしれない」

駄目押しをして、さらにヒナギクを追い詰める。

自ら飛び降りない限り、間違っても落ちるはずなどないのに、彼女はかわいそうなほど震えている。

けれど、怖がる姿がかわいいのだから、始末に終えない。

ハヤテは性器が一段と質量を増したのを感じた。

そろそろ絶対的な刺激が欲しいところだ。

ハヤテはズン！と勢いよく腰を突き出した。

「きやああつ！」

ヒナギクは夢中で手すりにしがみつく。

彼女の内壁が貪欲に彼に絡みつき、より深い繋がりを求めて蠢いた。

「…く…つ…いい…ですよ。すごく、絞まる」

ハヤテは初めて苦しげな声を上げた。

情欲に濡れ、掠れた声で名を呼べば、ヒナギクの秘部がさら

に彼を締め付けた。

「ひあつ…ああつ！」

爪先が浮き上がるほどに強くハヤテはヒナギクの身体を突い

た。

肌がぶつかり合う乾いた音と、濡れた水音が、他に誰もいな

い時計塔に響き渡る。

冷たい夜気も気にならないほどに火照った互いの肌。

ヒナギクから溢れたものがパタパタと冷たいコンクリートに染みを作っていく。

彼女の秘部が小刻みに痙攣し、限界を訴えた。

「ちようだい！ハヤテくんの、もの、ぜんぶ、私に！」

結合部分がこの上なく強く締めまり、ハヤテの充血した性器を

圧迫する。

ハヤテの熱が下腹部に集まり、大きく脈動した。

「…く…つ！」

「ひあつ、あつ、ああああんつ！」

ヒナギクを支えるために身動きの取れなかった彼は、その瞬間

間すべての精液をヒナギクの中に吐き出した。

彼女はビクンと痙攣してそれらを受け入れる。

力を失いハヤテに抱き支えられたヒナギクの秘部からは白濁

液が溢れ、月光に銀色に照らし出されたそれが彼女の細い脚に

伝っていた。

「あのー、大丈夫ですか？」

ハヤテは生徒会室に備え付けのミニキッチンでお茶を淹れ、

ぐったりとソファアーに身を沈めるヒナギクに差し出した。

「あのね、『大丈夫ですか？』とか聞かれると、かえって恥ずかしいんだけど」

ヒナギクが睨むと、執事はうるたえて謝った。

先程までの強気はどこへやら、ハヤテはやはりハヤテなので

ある。

「でもどうして…、あ、嬉しかったんですよ？ホントに。嬉し



かったんですけど、どうしていきなり……って疑問に思っただ。昨日までヒナギクさん、そんな素振り、いっさい見せなかったじゃないですか」

ヒナギクはハヤテを見上げ、言葉を探した。執事の言うことはもつともだ。

前日まで彼とは普通に接してきた。

否、気持ちをひた隠しにしてきたのだ。

それは彼の周りにいる女の子の気持ちを思うと、自分もハヤテのことが好きだと公表して行動に出ることがためらわれたから。

けれど、それは違った。

それは逃げだった。

彼女たちと同じ位置に立たなくては、対等ではありえなかったのだとやっと気付いたから。

自分は自分だ。

ハヤテのことが好きな部分も含めて自分自身なのだと、ヒナギクは妙にすっきりした気持ちで捉えている。

「二年に一度の誕生日くらい、願いが叶ったっていいじゃない」

ヒナギクは傍らのハヤテを見上げ、はにかんだように微笑んだ。

一年に一度、その日くらいは素直に我儘に奇跡が起こることをせつに願って

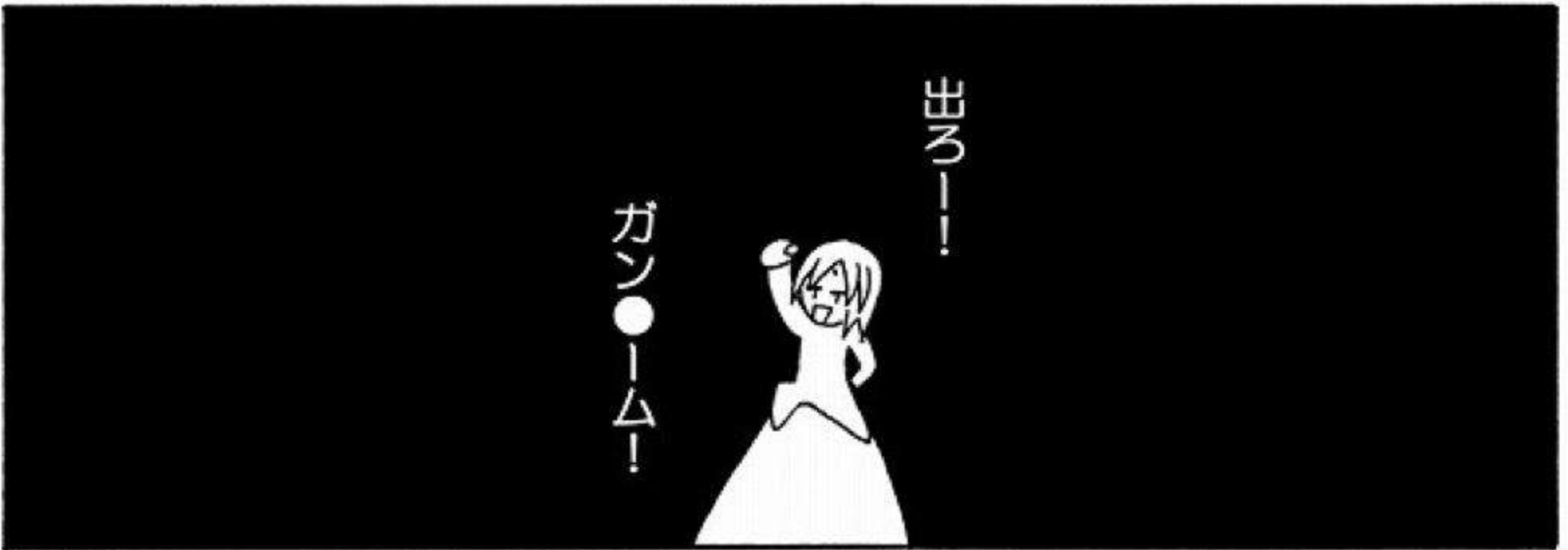
—— 終わり ——

おねーちゃんのいげん。



余裕は
この必殺技を見てから
かましなさい！

私、お姉ちゃんに
ケンカで負けた
事なんて一度も
ないじゃない



ガーンム！

UNEE...!



ほんっ ♪



何でガン●ラが
召喚されるのよ！



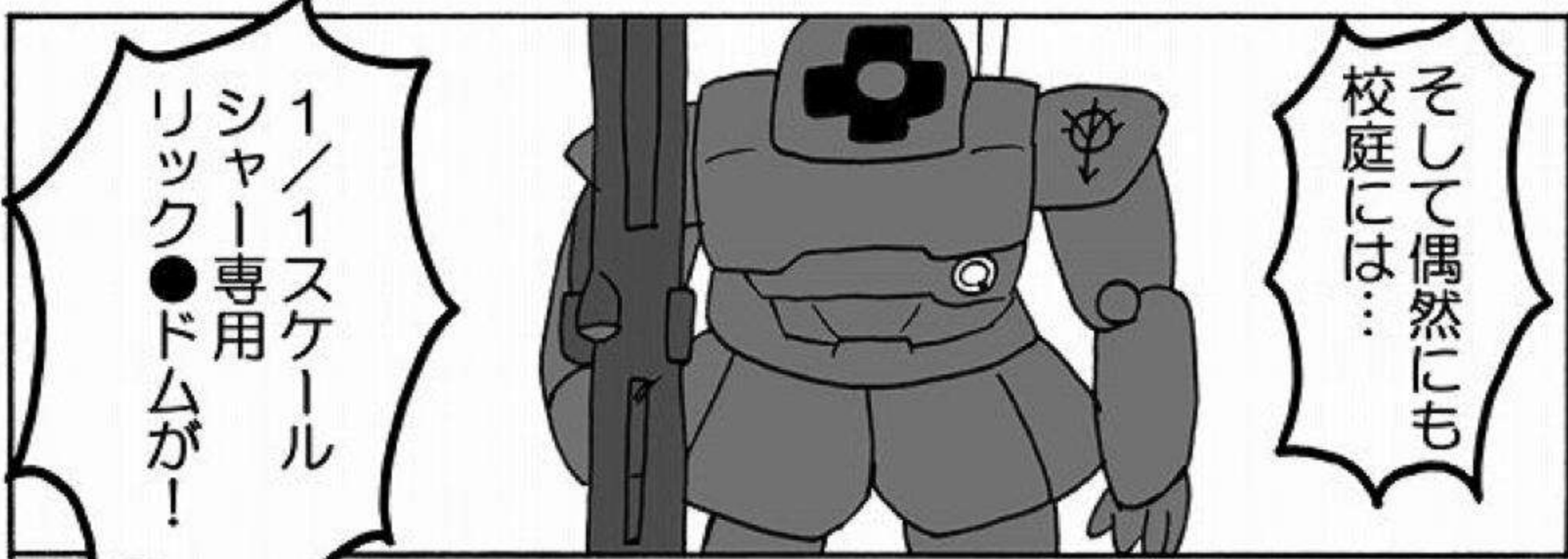
確かに俺は
「輝くガン●ム」では
ないが…
雪路、お前はひとつ
重大なことを
見落としてるぞ

なんだって！



俺はあのゼロ戦を
手足のように操る
伝説の使い魔
「ガン●ールヴ」
(と同じ声)だ！

つまり、この世の
ありとあらゆる
武器を自在に操る
ことができる！
(と思っ)



そして偶然にも
校庭には…

1/1スケール
シヤ●専用
リック●ドムが！



しまった！
リック●ドムは
宇宙専用MSだから
地上では戦えん！

NO!

それ以前に
プラモデルで
あった

ぱぷろふのいぬ。



すごーい！
 テムさんちの息子に
 ア●バオア●クイーで
 同一種MS撃墜数の
 最多記録を樹立された
 ヤツのダイクンの息子
 仕様がこんなところに！

まさかこんなところで
 お目にかかれるとは！



「コクピットまでおんこん！
 なんてよくできた
 ガン●ラだ！」

がっちゃん



幻の系統「虚無」の
 使い手（と同じ声）

ぱったり。

と、その使い魔
 （と同じ声）



この犬ー！

ブスッ！



OKでないままおわる。